

## 天よりの啓示に背かず

フェストゥスの前における裁判の数日後、アグリッパ王とその妻ベルニケが表敬訪問のためにカイサリアにきた。そのアグリッパ王の前で再びパウロは弁明の機会が与えられる。謁見室には、威風堂々と華やかに衣装をまとって王と王妃の他、総督フェストゥス、その補佐役たち、高官たち、千人隊長たち、町の重要人物たち等、そうそうたる人物たちが席に着いた。

その中でパウロは堂々と彼らを見つめ大胆に弁明するが、パウロの弁明は彼の劇的回心という証しを加えた強力な伝道説教であった。彼はまず、フェリサイ人としての自分の生い立ちを語る。そして熱烈なフェリサイ派ユダヤ教徒として、どのように熱心に、熱狂的にキリスト教会を迫害し撲滅しようとしたか、しかしダマスコ途上で復活の主に出会い劇的に回心し、それ以来あらゆる困難の中で「天よりの啓示に背かず」この福音を宣べ伝えて来た。主イエスこそモーセも預言者たちも約束した待望のメシアであり、私はその証人である！と。そして最後に彼は問い掛ける、「神が死人をよみがえらせるということが、あなた方にはどうして信じられないのですか」。

ジェスチャーを交えて、彼は熱烈に彼らに訴え、問い掛けた！ ここで立場が逆転する！ 一囚人が、王や総督や並みいる高官たちに向かって決断を迫る！ それを聞いた人々は（総督も王も高官たちも）圧倒された！ 特にパウロは、大胆にアグリッパ王に挑戦する（26節）。「アグリッパ王よ、あなたは預言者たちを信じますか。信じておられると思います」。それはまさに、アグリッパに対する核心を突く問いであり挑戦であった。

そこで、アグリッパは、一瞬たじろいだ後、「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか」（口語訳「お前は少し説いただけで、私をクリスチャンにしようとするのか」）と言って、逃げようとした。それに対してすかさずパウロは答える（29節）。「短い時間であろうと長い時間であろうと王様ばかりでなく、今日この話を聞いて下さるすべての方が、私のようになったださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが」。

私は、被告の席から堂々と語るこのパウロの言葉にいつも驚く。「このように鎖につながれることは別ですが」。ここには驚くべきパウロのユーモアがある。苦しみの中のユーモアがある。信仰によるユーモアがある。信仰に生きる者のユーモアがある。苦難の中で、なおもこのようにユーモアを語る事ができるとは！！

そのようなユーモアはどこから生まれるのか。それは、どのような状況に置かれても、神のご主権を疑わず、その恵みの確かさを確信する信仰から生まれる。自分が置かれている境遇を決して悲観しない。いつまでもくよくよししない！失われたものを数えてくよくよするのではなく、今残されているものを心から感謝する。現実を冷静に受け止める。如何なる事態も神のご主権の外にあるものではないことを認め、その中ですべてを神に委ねる。そこから、たとえ直面する現実が厳しくとも、ユーモアをもって捉える信仰のゆとりが生まれる。苦しい時も笑って受け止め、明るく希望をもって耐えていくことができる。そのようなユーモアを解することが出来るということは、なんと素晴らしいことであろうか、と思う。